



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 6

2007年3月号



はじめに

平成17年7月に本研究領域が発足してから2年近くが過ぎました。この間、国内・外における周辺・背景研究は着実に進行してきましたが、シリア現地の調査に関しては、シリア考古博物館庁との許可交渉が予定通りには進行せず、当初の計画である、1) ビシュリ山系現地における遺跡分布調査による遺跡の分布状況と年代の解明(第1年次)→2) 分布調査の成果に基づく、全体課題に適合する遺跡の選定と発掘調査(第2～4年次)→3) 発掘調査の成果を踏まえた、現地での総括的研究と補足的調査の実施(第5年次)は大幅な変更を余儀なくされ、領域メンバーの方々に落ち着かない日々を強いてしまいました。

しかしながらようやく、本年の2月15日にビシュリ山系の現地調査の許可があり、同日から3月10日までビシュリ台地で遺跡の分布調査を実施して、遺跡の分布状況と年代を明らかにしました。

さらに、4月29日から5月30日にかけて、ラッカ市の東50キロメートルにある青銅器時代のガーナムアリ遺跡の平面図を作製しました。

この2度にわたる調査がもたらした成果により、現在、シリア考古博物館庁より、青銅器時代の2つの遺跡(ハマディーン、ガーナムアリ)の発掘申請に対する許可の内定を受け、この8月にはガーナムアリ遺跡において1ヶ月間の発掘調査を実施する予定です。

ガーナムアリ遺跡は青銅器時代前期の遺跡と考えられ、本研究領域の全体テーマ「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」にとって格好な遺跡です。

以上のような研究の急進展を機会として、本年2月から1ヶ月間実施した遺跡分布調査にかかわる、性格の異なる文章4編をこのニューズレターNo.6に掲載しました。現地調査の様子的一端を知っていただき、遺跡の分布状況と年代を知っていただけたらと思います。

平成19年6月30日
領域代表者 大沼克彦

目次

第1次ビシュリ調査日誌	大沼克彦	1
ジャバル・ビシュリ周辺における遺跡分布とその立地の歴史的背景		
第一次調査成果を中心に	長谷川敦章	10
表採遺物から見た各遺跡の時代	木内智康	18
2007年3月ビシュリ山系現地調査	星野光雄	24

表紙	A	A: ガーナムアリ遺跡
	B	B: ガーナムアリ遺跡の遺構
	C	C: ガーナムアリ遺跡の遺構と休憩所

第1次ビシュリ調査日誌

大沼克彦（国士舘大学イラク古代文化研究所）

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」研究代表者

2007年

2月12日（月）

大沼、沼本の2名、羽田／関西空港発、ドーハ空港（カタール国）経由でダマスカスに到着。空港でSamer氏が迎えてくれる。そのままスルタン・ホテルに直行し、夜に藤井、宮下両氏と合流。とりあえず、全員が同ホテルに宿泊する。翌13日の午前9時に考古博物館庁に出向くことで合意して、就寝。

2月13日（火）

午前9時、考古博物館庁に出向。Bassam、Michel両氏と会い、以下の点で同意する。

- 1）藤井、宮下、沼本の3氏は14日にラッカに向かい、宿舍、車等の準備をする。
- 2）大沼は14日に考古博物館庁でMichel氏とサーベイの契約文書を作成し、和訳を付けて日本にファックスし、追ってDHLで郵送する契約文書の原本に領域代表者の大沼の所属長である国士舘大学若林学長の署名と大学公印をもらい、早急にダマスカスに返送する。

考古博物館庁での打ち合わせを終えたのち、ホテルをファラディース・タワー・ホテルに変更する。値段は1泊80ドル。午後の2時にSamer氏と会い、14日の午前9時に車をファラディース・タワー・ホテルまで調達し、藤井、宮下、沼本の3氏をラッカまで送るように依頼する。午後8時に4名で夕食をとり、14日の行動の最終確認をおこなった。

2月14日（水）

午前8時、大沼は考古博物館庁に出向し、Michel氏と会い契約文書の作成にとりかかる。まず、Michel氏が提案したシリア側研究者の担当時代と遺物に関して同意したのち、日本側が担当する時代と遺物を提起した。

その結果、「調査の基本方針は各調査の開始前にシリア隊（Michel al-Maqdissi）と日本隊（大沼克彦）の両者の合意で決定する。旧石器時代、新石器時代、金石併用時代の3時代の遺物は日本隊が担当し、青銅器時代（前期、中期、後期）の遺物はシリア隊が、鉄

器時代の遺物はシリア隊と日本隊の両者が、そして、古典時代（ヘレニスティック、ローマ、ビザンツ）とイスラム時代の遺物はシリア隊が担当する」点で同意した。さらに、この契約は初年度の調査が終了した時点で再考することでも同意した。

午前11時に契約文書の和訳を終了し、訳文を国士舘大学の岡田氏にファックスし、「DHLで送られる契約文書の原本に若林学長の署名と大学公印をもらって、26日にシリアに来る際に持参してほしい」旨、依頼した。

藤井、宮下、沼本の3氏はSamer氏が調達した車で午前9時にファラディース・タワー・ホテルを出発し、ラッカへ向かう（午後5時に到着）。

2月15日（木）

昨日岡田氏に送ったファックスが届いていなかったことを確認し、午前6時半にファラディース・タワー・ホテルから再送した。しばらくしてからイラク研とオリ博に電話をかけ、届いたことを確認した。

岡田氏にも電話をかけ、「若林学長と面談して、署名と大学公印をもらおう」ように依頼した。若林学長には「岡田氏と面談した際に署名と大学公印をいただきたい」と依頼をして、快諾を得た。

午前7時半、タクシーでファラディース・タワー・ホテルを出発。ラッカに向かう。

午後1時にラッカ着。先ずラッカ博物館を訪れ、藤井、宮下、沼本の3氏が宿泊するホテルの名前（ラザワルド・ホテル）を聞き、向かう。ホテルで休息していると、ビシュリ台地のサーベイを終了した3氏が4時頃にホテルに帰着。8時にホテルのレストランで落ち合うことにした。

8時にレストランで夕食をとる。10時頃、ラッカ博物館のNawras氏ら3名がホテルを来訪し、歓談して11時頃に別れた。この間、「今回はホテル住まいでよいのでは？ ユーフラテス河沿いに大きな遺跡があるのはもちろんだが、ビシュリ山に発するワジの合流地点がねらい目ではないか？」などを話し合った。大沼の部屋で衛星地図を見てから、翌朝の8時に作業開始ということで同意して、就寝。

2月16日（金）

午前8時20分、ラッカ博物館の Nawras 氏がホテルに到着。全員でビシュリ山地へ向かう。まず、ビシュリ山から流下するワディの合流地点にあるガーナムアリ町を南に曲がり、ワディ・アルウバイドに沿って進むと、古井戸のビール・アシュワンに到着した（写真1、2）。

ビール・アシュワンを見終わったあと、タール・スバイに行き、ケルンを確認した（写真3、4）。

タール・スバイ近くの山裾の奥まったところにビール・スバイと呼ばれる古井戸群が存在する。ここにはムステリアンやPPNBの石器が大量に分布している。大量の接合資料が存在すると思わせるほど多くの石器が原位置を保って残っている。エンド・スクレイパー、彫器といった日常生活石器も大量にあり、ここは、石器製作場であっただけではなく、居住遺跡でもあったと思われる（写真5、6）。

ビール・スバイで日が暮れてきたので、往路と反対の西回りで帰ることにした。ユーフラテス河沿いにあるマンスーラ町にはサッディエンという一対遺跡がある。青銅器時代中期の遺跡とのことだが、かつて国士舘大学がイラク・ハディーサ地域で調査したオーシー

ア遺跡の直近でみた、上半部分を盛り土でつくったジグラット状の墓によく似ている。2つの塔状遺構と住居が組み合わさった遺跡である（写真7）。

本日の旅行で知ったことは、ユーフラテス河直近の段丘からビシュリ山に向かって入って間もない土漠状台地の辺縁部分には小規模なテルが少数散在するということである。

夜の7時にホテルに帰着し、8時に食事をする。翌17日にダマスカスへ向かう藤井、宮下両氏と、今回の現地参集が短期間ながら大成功であったことを確認する。同時に、今後の調査の成功を願う。

2月17日（土）

午前9時、藤井、宮下両氏は帰国のためダマスカスに向かう。11時にインターネット・カフェでラン・ケーブルによるメールを試み、国士舘大学情報科学センターのウェブ・メールを用いてメールが可能なことを確認する。午後は休息。

夜10時、Nawras 氏がホテルに来訪。深夜バスでダマスカスに行き、翌18日に全国博物館員会議に出席するとのこと。同氏とお茶を飲み、11時に別れる。12時に就寝。



写真1 ビール・アシュワン



写真2 ビール・アシュワン近景



写真3 タール・スバイのケルン



写真4 タール・スバイのケルン近景

2月18日（日）

午前10時半、ラッカ博物館に出向き、館長の Anas 氏に合う。氏は合同調査におけるシリア側の現場主任である。若く、好感の持てる研究者である。同氏に本プロジェクトの趣旨、メンバー、そして、これまで調査開始が遅れてきた経緯などを説明し、協力を依頼する。本プロジェクトの意義を十分に理解した同氏は協力を約束した。

午前11時、宿舎探しのため、同氏の案内で沼本氏とラッカ市内の2軒のアパートを実見する。値段、内容から両者とも不適格と判断。午後1時、沼本、Ayham 両氏と昼食をとり、2時にホテルに帰る。

夕方の6時、Anas 氏がホテルを来訪。旧市街を案内してくれる。アッバス期のモスクは規模は小さいが、質素な美しさをたたえている。現在復元中とのことである。ウマイヤ期のカッスル・ベネーヤは病院だったらしいとのことである。バグダッド門はバグダッドの方向に向いている。

旧市街を見物したあと、レストランでお茶を飲む。Anas 氏はスペインで学んだだけに、趣味としてのギターの腕はプロ並みである。専門分野を聞くと、アッカド時代からアッシリア時代とのことである。我々のプロジェクトの趣旨、すなわち、アモリ人がビシュリ地域で発展してバビロン、アッシリア王国を形成した時期以前の都市的村落の形成の経緯に興味を持っていること、それ故に、河沿い集落と遊牧民との関係を明かしたいことを説明すると、非常に興味を示した。氏の興味はアッシリア王国と遊牧民の関係であるとのことである。このことは、我々の趣旨と一致する。

ハッサケ市近郊のタバン遺跡で400点以上の粘土板文書が出たことを話すと非常に興味を示したので、沼本氏を呼び出して歓談する。

ホテルに帰り、沼本氏と以下のことを話し合った。

- 1) Anas 氏はユーフラテス河沿いの遺跡を発掘したいようである。
- 2) したがって、シリア側の現場主任の同氏に対して、ユーフラテス河沿いの本格的遺跡の発掘を奨励する。
- 3) 日本隊は、ユーフラテス河から若干ビシュリ台地に入った地域の小規模遺跡を発掘する。これらの遺跡は、アッシリア、バビロン王国が形成される以前、アッカド期ぐらいまでのものが望ましい。

2月19日（月）

午前11時にコンピュータに接続するプリンターを買いに市内に出る。手頃なものを100ドルで購入した。



写真5 ビール・スパイ（1）（沼本氏撮影）



写真6 ビール・スパイ（2）（沼本氏撮影）



写真7 サッディエン遺跡（沼本氏撮影）

ダマスカスにいる宮下氏に連絡を取る。常木、長谷川の両氏が夜にラッカ到着とのこと。宮下氏は Michel 氏から「調査の許可が明日の午前中に出るので、契約文書を日本に持参して、署名をもらい、公印を押してもらってシリアに来る日本人研究者に持ってきてもらうように」と言われたとのこと。大幅に遅れている現地調査の許可も今度は間違いなく出そうだ。

午後の6時に Nawras 氏と会う。氏は、ダマスカスで Bassam、Michel 両氏と会った際に、「日本隊との友好関係を深めるために協力を惜しまないように」と言われたとのことである。明日の午前中に Michel 氏から正式許可のファックスが来るとのことなので、午後には正式に調査を開始できるだろう。

午後8時、常木、長谷川両氏がホテルに到着した。夕食を終えると Anas 氏が来訪。全員で懇談して、相互の協力を誓う。10時に沼本氏の部屋で常木、長谷川両氏を歓待し、11時に解散し、就寝。

2月20日（火）

昼の12時半に博物館に出向くが、ダマスкасからの連絡はいまだ届いていなかった。午後3時、Nawras 氏を伴って、16日に訪れたビール・スパイに向かう。場所探しに手間取り、到着したのは日没直前だった。1時間ほどで引き返し、8時にホテル着。途中で採集遺物用のビニール袋を購入する。

ホテルには、西秋班の研究協力者・木内氏が到着し



写真8 正式サーベイ開始の記念撮影
(一番左には関係のない人物がちゃんと写っている)



写真9 ビザンツ時代のルサーファ要塞



写真10 ルサーファ要塞内部

ていた。共に夕食をとる。明日は、8時半に博物館に行き、9時から遺跡分布調査を開始することにした。分布調査は、二手に分かれて効率的におこなうことにした。大沼、沼本、木内の班、常木、長谷川の班の2つである。12時過ぎ、就寝。

2月21日（水）

8時半に博物館に出向き、Nawras 氏に本日の行動計画を説明する。9時に正式サーベイ開始の記念撮影（写真8）を終えて出発する。車は2台。1台は常木氏が運転し、長谷川氏と Ayham 氏が同乗する。もう1台は運転手つきで博物館から調達してもらい、大沼と沼本に Mahmmud 氏が同乗する。

まず、ラッカ市の西方のマンスール町から南下してビシュリ山に向かう。ルサーファ町の2キロメートルほど手前に遺跡があったので、車を降りて遺物を採集する。ビザンツの土器である。ルサーファ町には巨大な砦がある。ビザンツ時代の要塞とのことで、現在、シリア考古博物館庁が優先的に修復と復元につとめている（写真9、10）。広大な砦の内部にはイスラムの礼拝場が建てられたとのことである。

次に、ハルバット・ハルーという遺跡で土器を採集する。時代はビザンツ。マンスール町に引き返し、そこからラッカに向かう途中で再度ビシュリ山方面に南下して遺跡を探索する。ユーフラテス河の低位段丘かとも思われるバルーダ町という地点に低いテル状の地形があったので、遺物を採集する。特徴のない石器がかなりの量落ちていた。このテル状の盛り上がりはバリーア・テル・ハンマムと言うらしい。

そこから南方に明らかな遺跡テル（シリアでは自然丘もテルという。イラクでは自然丘をメサということもある）が見えたので、そこに行って遺物を採集する。ベンチ・マーク（GCHS C113）のあるこの遺跡は青銅器時代のものかと期待したが、ビザンツ時代の遺跡だった（写真11）。



写真11 GCHS C113遺跡



写真12 エル・ホール遺跡

サーベイを終え、4時半にホテルに帰る。

8時にブスタン・レストランで夕食をとる。下痢がひどかったので、さっぱりしたものと思って注文したメニューも相変わらず油っこいものだった。12時、就寝。

2月22日（木）

8時半に博物館に出向き、Ayham 氏に本日の行動計画を説明する。昨日の続きのサーベイ、すなわち、バルーダ町の東側のビシュリ台地の縁をラッカに向かって探索することを説明する。昨日と同様、車は2台。1台は常木氏の運転、長谷川氏と Ayham 氏が同乗する。もう1台の博物館の車は運転手の Abd 氏つきで、大沼、沼本、木内と Mahmmoud 氏が同乗する。

まず、昨日訪れたGCHS C113遺跡の2キロ南にあるエル・ホール遺跡（写真12）で土器を採集する。ビザンツ・ローマ時代の遺跡である。ここで一休みしていると、アレppoからの来客があり、常木班はラッカに戻る。

いったん幹線道路に戻り、やや東に向かったところでまた南に折れてビール・クレディに行き、土器を採集する。ローマ時代の井戸を中心とした遺構である（写真13）。井戸は深さ70mだという。ここで、ラッカで買ったリジャージャの丸焼きで昼食をとる。なかなかの味である。

つぎに探索したカブ・アル・サギールも井戸を中心とした遺構である（写真14）。土器からみて、この遺構もローマ時代のものらしい。井戸の深さは170mだという。そこまで深くはないだろうが、大きな石を落とすと、底部に届くまで7秒ほどかかった。70m以上はあるかと思われる（子供の頃、高さ100mほどの日光の華厳の滝の水塊の落ちるのが確か9秒で、1秒で10mほど落ちたという遠い、曖昧な記憶から）。

途中で休息した仮家屋（雨期に羊に草を与えるため



写真13 ビール・クレディ（木内氏撮影）



写真14 カブ・アル・サギール（木内氏撮影）



写真15 テル・ムヘール

一時的に滞在する家とのこと）の家長が「大きなテルがある」というので、テル・ムヘールに向かう。このテルは基礎が自然丘で、その上に墓や小規模遺構が散在する。ほとんどの遺構はイスラム以後のもののようなのだが、周囲が平坦なので非常に目立つテルである（写真15）。イスラム以前にも何らかの目的で利用された可能性がある。サウンディングをおこなうには格好な場所かもしれない。

4時にホテルに帰り、8時にホテルで夕食をとる。市内のレストランでは美味しい料理が望めず、ホテルで我慢することにした。翌23日は金曜日なので休日にして、内作業をすることにした。長谷川氏は地図づくり、木内氏は採集遺物の洗いをする予定である。

2月23日（金）

今日は休日なので各自自由行動だが、長谷川氏は地図作成、木内氏は採集遺物の洗いに取り組んだ。昼過ぎ、ラッカ市内にあるピア遺跡を訪れる。この遺跡は初期王朝期の末から青銅器時代前期にかけたユーフラテス河流域拠点都市だったといわれている（写真16～18）。

ピア遺跡が西方の諸王朝に対峙していたのか、あるいはまた、ビシュリ方面のアモリ人に対する防御壁になっていたのか、非常に興味深いところである。

油っこい食事に飽きてきたので、昼食は、通りで買ったインスタント・ラーメンにした。湾岸諸国製だが、なかなかの味である。午後4時にインターネット・カフェに行ってメールをうつが、混んでいたせいか、な



写真16 ピア遺跡遠景



写真17 ピア遺跡



写真18 ピア遺跡：中心建物の発掘跡

かなか送信できなかった。

夕食もラーメン。常木、長谷川、木内氏が参集した。翌24日は朝8時半に博物館に行き、常木班はビール（井戸）踏査、大沼班は昨日の続きの踏査をおこなう。11時に就寝。

2月24日（土）

8時半に博物館着、9時に調査を開始。2班に分かれ、大沼班は運転手の Abd 氏と沼本、木内氏の4名でラッカの東方ビシュリ方向部分を、常木班は Mahmmud、長谷川氏の3名でラッカの東方ビシュリ方面のビールを調査する。

アドラハ・ハウージ・シャンナムという町から南におれ、一昨日の続きの調査をおこなった。複雑に入り組んだ河岸段丘面に遺跡らしい2つの丘をみて近づいたが自然丘だった。その直後も同じ見間違いをした。この種の入り組んだ地形で自然丘と遺跡丘を識別することの困難さを実感した（写真19、20）。

このあと常木班と分かれて、一昨日訪れたテル・ムヘールの方向に向かう。途中でうっかりと軍施設に迷い込んで、15分ほど取り調べられたのち、テル・ムヘールの1.5kmほど東にあるテルで昼食をとる。ここにはイスラムの土器が少量散布していた。昼食の後、ルサーファ町へ向けて調査を続行した。その途中で大き



写真19 アドラハ・ハウージ・シャンナム町近くの自然丘（1）



写真20 アドラハ・ハウージ・シャンナム町近くの自然丘（2）



写真21 突然現れた‘くぼみ洞穴’



写真22 ‘くぼみ洞穴’ 近景

な‘くぼみ洞穴’にたどり着く。恐ろしいほど急角度の深い自然洞穴で、ワディの水が四方から流れ落ちて溜まるような地形である（写真21、22）。

本日の調査により、ユーフラテス河段丘上のビシュリ台地には、ローマ、イスラム時代以外の遺跡がほとんど見あたらないことがわかった。したがって、本プロジェクトのテーマである「アモリ人が都市・村落を形成した経緯」を明かし得る遺跡は、ユーフラテス河の氾濫原に残っていると思われる。

5時にホテルに帰り、6時にLubna氏を出迎えた。彼女は本郷班の研究協力者で、動物考古学の専門である。ホテルで全員で夕食をとり、翌25日の予定を確認して解散する。

明日は、午前中に沼本氏がハッサケに行き、そのまま帰国する予定である。大沼班は段丘直上のビシュリ台地の調査を終了し、常木班はビールの調査を終了する予定である。12時、就寝。

2月25日（日）

今日も2班に分かれて調査をおこなった。大沼班は運転手のAbd氏と木内氏で昨日同様、ラッカの東方ビシュリ方向部分を調査した。先ず9時半に出発して、ガーナムアリ町の道路から北へ800mほど入ったユーフラテス河氾濫原にあるハマディーン遺跡を調査し



写真23 ハマディーン遺跡



写真24 ハマディーン遺跡のドア・ソケット

た。常木班はAyham、長谷川氏の3名でラッカの東方ビシュリ方面のビールを調査した。

沼本氏は午前11時にハッサケに向かった。

ハマディーン遺跡は小規模な遺跡だが、青銅器時代の土器片とドア・ソケットなどが散乱している（写真23、24）。氾濫原にある遺跡なので、日本隊による発掘には許可がおりない可能性が高いが、本調査はシリアとの合同調査なので申請を試みる価値は十分にある。

ガーナムアリ町から南に折れ、ビシュリ山の方へ3kmほど行った地点で低い遺跡状のテルを見たので東に曲がり、800mほどの地点（A遺跡）と600mほどの地点（B遺跡、C遺跡）に行く（写真25～27）。

これらの遺跡で、ハマディーン遺跡のものと同様な土器片を採集した。木内氏によれば、青銅器時代前期の土器もあるようだ。これらの遺跡の盗掘ははなはだしく（帰国後に分かったことだが、盗掘とドイツ人による発掘調査によるものだった）、発掘を申請する格好な理由になるかもしれない。

南東方向500mほどの地点（D遺跡）でも土器の採集を試みたが、土器片は少なかった。A、B、C、D遺跡で土器を採集してから、さらに南下して調査を続けたが、遺跡を見つけることは出来なかった。

5時にホテルへ帰着した。6時頃、イドリブから

Shakir氏が到着した。シリア隊の2人目の現場主任だという。7時半にホテルで夕食をとる。Anas、Nawras、Ayham、Shakir、Mahmmod、そして、運転手のAbd氏らシリア側関係者のすべてが参集してにぎやかだったが、Anas氏が明後日から2週間、スペインに出張するとのことで、送別会の雰囲気である。出張の送別会にしては重々しい雰囲気、あたかも、職場変更の送別会のようにもみえた。

夕食の後、Ayham、Shakir両氏を自室に招き、本プロジェクトの趣旨と、この調査があくまでも合同調査である事実を説明し、シリア隊主体による河沿い遺跡の発掘調査、日本隊によるハマディーン遺跡とA、B、C遺跡の発掘調査、および、ビシュリ台地のサーベイの実現へ向けた協力を依頼した。両氏とも可能な



写真25 A遺跡



写真26 盗掘のはなはだしいA遺跡



写真27 B遺跡

限りの協力を約束した。12時、就寝。

2月26日（月）

本日は内作業。常木氏は朝11時にケルクに戻る。長谷川、木内氏は博物館で展示土器を観察し、青銅器時代前期の土器の特徴を研究しようとしたが、精製土器しか展示されていないので、期待どおりの観察が出来なかった。

昼食の後、長谷川、木内氏はShakir氏から古典時代（ヘレニスティック、ローマ、ビザンツ）の土器の特徴を学ぶ。

夕食の後、プリンターを調整するために販売店に行く。いったんホテルに帰り、インターネット・カフェで大沼研究室に最新の情報を送付した。12時、就寝。

2月27日（火）

午前9時に出発し、一昨日に訪れたハマディーン遺跡を訪れ、つぎに、ガーナムアリ町から南にビシュリ方向へ3kmほど入ったところにあるA、B両遺跡を再度訪れた。Shakir氏によると、ハマディーン遺跡は部屋付き壁で円形状に囲まれているとのことである（写真28、29）。

A、B両遺跡を訪れたのちいったん幹線道路に出て、東に曲がり、ガーナムアリ遺跡を訪れた。この遺跡はハマディーン遺跡とほぼ同規模で、木内氏によると青銅器時代前期にまでさかのぼる可能性が高い。再びビシュリ台地に引き返して昼食をとった後、西に向けて調査を続行した。

アドラハ・ハウージ・シャンナム町に至る間に実感したのは、この地域は起伏が著しく、大きなワディが存在していて絶景だが、遺跡らしいものはほとんどないということである（写真30、31）。

本日で調査区域の北半部分の調査を終了した。一連の調査を通して、ユーフラテス河段丘上のビシュリ台地は、東側には青銅器時代の小規模遺跡があるものの、西側には、ローマ、ビザンツ、イスラム時代の遺跡が多いという、場所による遺跡の時代差があることを確認した。また、調査区域の南半部分には遺跡が少ないこともほぼ確実である。

ホテルへの帰路、ガーナムアリ遺跡とラッカの間のユーフラテス河氾濫原にハマディーン遺跡と同様規模の遺跡が少なくとも2つ、ほぼ等間隔に存在することを確認した。4時にホテル着。7時半に夕食をとる。

9時頃、Nawras、Ayham、Mahmmod氏が来訪。3階のロビーで談笑した。12時に就寝。

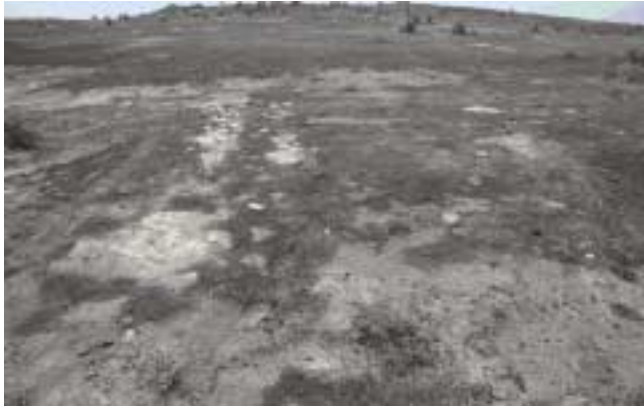


写真28 ハマディーン遺跡の遺構（1）



写真29 ハマディーン遺跡の遺構（2）



写真30 遺跡がほとんど存在しないビシュリ台地北縁部



写真31 アドラハ・ハウージ・シャンナム町近く、ビシュリ台地北縁部の景観

2月28日（水）

今日はレポートづくりに終始した。夜の8時に岡田、依田両氏がホテルに到着した。岡田氏はシリア国内をまわる予定。明日は、午前中に大沼が岡田、依田両氏をハマディーン、ガーナムアリ、A、B、C遺跡に案内する。就寝、12時。

3月1日（木）

今日もレポートづくり。岡田、依田の両氏は9時にハマディーン、ガーナムアリ、A、B、C遺跡に向かった。長谷川、依田の両氏は3時のバスでダマスカスへ向かった。

午後7時、運転手の Abd 氏に給料を支払う。7時半から夕食をとり、関係者のほとんどが集い、打ち上げ的な集まりになった。12時、就寝。

3月3日（土）

レポート作成を終了。午後6時にタクシーでダマスカスに向かった。12時にダマスカスのスルタン・ホテルに到着。

3月5日（月）

午前中に考古博物館庁に出向き、レポートを提出した。

3月7日（水）

午前中に考古博物館庁で Bassam、Michel 両氏に会い、別れの挨拶を済ます。午後6時、スルタン・ホテルで松本、岡田氏と合流。夕食前に、マルジェ広場のハヤム・ホテルにある地図店で5万分の1の地図（ラッカ、マンスーラ、ルサーファ、ガーナムアリに囲まれた地域の4区画分）を購入した。松本氏は明日からデレゾールとラッカの間のユーフラテス河南岸と北岸を探索して往復する。スルタン・ホテルの受付に、10日に到着予定の星野先生に伝言を残す。

3月8日（木）

午前、Nawras、Ayham の両氏がバスで到着。岡田氏は帰国した。松本氏は探索へ出発。夕食は、岡田班の研究分担者・新井氏がすすめてくれたアリババ・レストランで、Nawras、Ayham、木内氏ととることにした。

ジャバル・ビシュリ周辺における遺跡分布とその立地の歴史的背景 —第一次調査成果を中心に—

長谷川敦章（筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科）
計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究協力者

はじめに

本稿は2007年2月～3月にかけて、ジャバル・ビシュリおよびその周辺において行った考古学的踏査の成果概要を、遺跡の立地と分布を中心に示すことを目的とする。なお各遺跡の詳細な時期を含む採集された遺物とその分析に関しては、本誌に掲載されている木内氏の報告を参照していただきたい。

本調査の対象地域であるジャバル・ビシュリ周辺は、その地形的特徴から大きく4つの地域に分類することができる（図1）。第一にラッカとディ・エッ・ゾールを結ぶようにして流れるユーフラテス河の氾濫

原である。その氾濫原はユーフラテス河より南側において、流れが蛇行しているため狭いところで南北に約1km広いところで約5kmの幅で、ユーフラテス河に沿って東西に広がっている。標高はおおよそ210m～230mほどである。氾濫原の殆どの部分が農地として利用されている。現在はシリア政府により灌漑整備がおこなわれ、計画的に水路が張り巡らされている。第二に台地の縁辺部である。台地の北の縁は標高おおよそ300mであり、ユーフラテス河の氾濫原に立って南方の台地をみると高さ約70mの壁がひろがるように見える。この壁のような台地の縁の中腹や氾濫原との境界

にあたる地域には、現在、集落が多く分布する。第三の地域は、台地の縁からジャバル・ビシュリの裾までの、広くなだらかな台地上である。ジャバル・ビシュリは、標高が800mほどであるが、台地の縁から南方を望むと、まるで平原のむこうに低く平坦な丘があるように見える。ユーフラテス河の2つの三日月湖の間に位置し、台地の縁に張り付くように位置している町ハウイジャット・シュナン（Hauijt Shnnan）を通る南北軸で地形の変化を見た場合、標高約300mの付近からジャバル・ビシュリの山頂までは、直線距離にしておおよそ70kmである。ジャバル・ビシュリは標高400m付近から徐々に隆起していくようであるが、台地の縁から標高400m地点までは約35kmあり、それは山頂までの約半分の距離である（図1）。すなわちこの南北軸における35kmの範囲が、第三の地域にあたる。そして最後の第四の地域は、標高400m以上のジャバル・ビシュリの内部である。今回の調査では、上述した4つの地域区分のうち、第一の氾濫原、第二の台地の縁辺部、第三のほぼ平坦な台地上において遺跡を確認することができた（図2）。本稿では、この地域分類に即して確認した遺跡を概観していきたい。

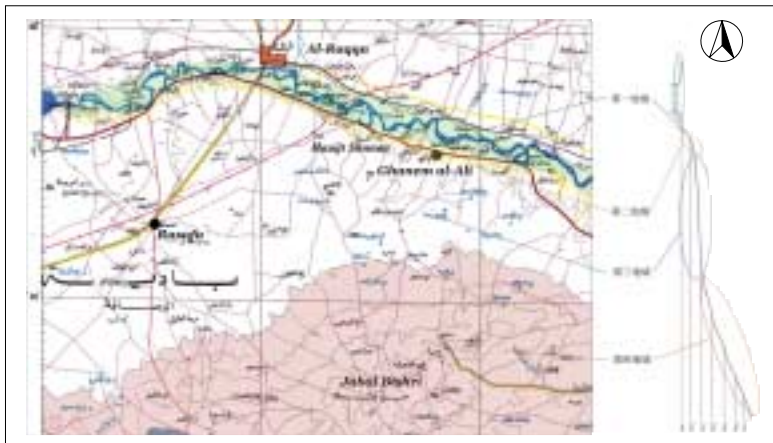


図1 ジャバル・ビシュリ周辺の地形的特徴（左図：シリア政府発行10万分の1地形図を一部改変。右図：地域分類の模式図、筆者作成。）

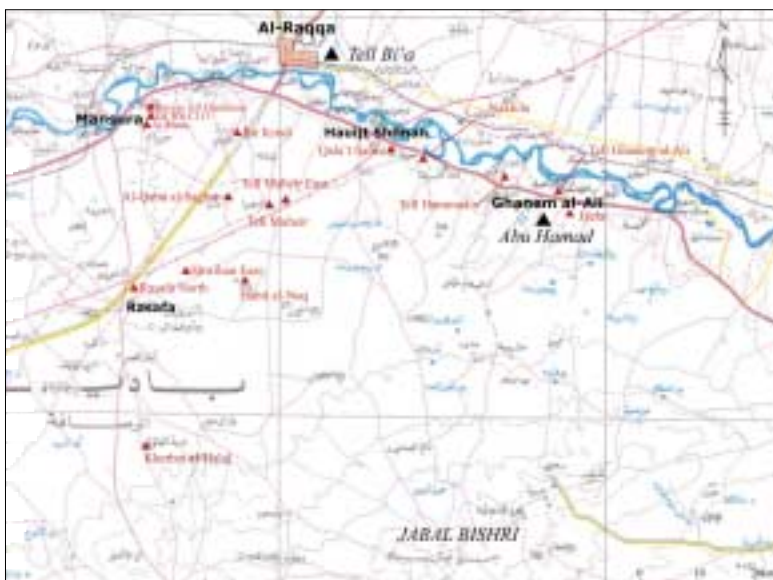


図2 調査地全域における遺跡分布図（シリア政府発行10万分の1地形図を一部改変）

台地の平坦部

台地平坦部においては、ラッカ市より西側

に遺跡が集中して確認された。はじめにそれらの概略を紹介したい（図2）。

バライット・テル・ハンマーム遺跡（Barayt Tell Hammam）

マンスーラ（Mansura）から北東に約10km、バルダ（Baluda）村に位置する。なだらかで低いマウンドをもつ。中期旧石器時代およびイスラム時代の遺物が少量確認できる。

GCHS C113遺跡（Site GCHS C113）（写真1）

バライット・テル・ハンマーム遺跡から1kmほど南に位置するテル型遺跡である。テルの頂上部には、一辺約20mの方形をする建築遺構の基礎が地表面に現れている（写真2）。ビザンツ瓦が大量に散乱しており、またビザンツ時代の土器片が採集できた。テル型遺跡ではあるが、青銅器時代の遺物は残念ながら確認できなかった。当該遺跡はコンクリートのベンチマークが設置されており、GCHS C113と刻まれている。

アル・フラ遺跡（Al-Hura）（写真3）

マンスーラから東に1km、GCHS C113遺跡から南に2kmに位置する。南北45mほど、東西20mほどの低いマウンドを有する。また石膏を利用した、大きさ約2.2m×0.8mの石棺が東西方向に長軸を向け一基確認された（写真4）。

テル・ムヘイル遺跡（Tell Muheir）

マンスーラから南東に30kmに位置する中規模テル型遺跡である。自然丘陵上に埋葬施設等の痕跡が確認された。当該遺跡も残念ながら採集された土器はイスラム時代のものが主体を占める。

テル・ムヘイル東遺跡（Tell Muheir East）

テル・ムヘイル遺跡の東約1.5kmに位置する小規模テル型遺跡である。イスラム時代の土器を少量採集することができた。

ラサーファ北遺跡（Rasafa North）

ラッカ市とラサーファ遺跡を繋ぐ道路の東側に面する、低いマウンドを持つ遺跡である。ラサーファ遺跡の北約2kmに位置する。

2005年の常木晃氏の現地視察において、現在も使用されているビール・ディッディ（ディッディの井戸）を中心とした、ローマ＝ビザンツ時代からイスラム時



写真1 GCHS C113遺跡



写真2 GCHS C113遺跡の方形区画



写真3 アル・フラ遺跡



写真4 アル・フラ遺跡の石棺

代を中心に営まれてきた複合遺跡が報告されている（常木2005）。そこで類似した複合遺跡を確認するため、ビールを中心とした調査を行った。今回調査を実施したビールは、合計8カ所である。特にビールの多いラッカ市より東側の地域では、シリア政府発行の5万分の1の地形図に記載されている「ビール」を冠する地

名をいくつか選択し、試験的に踏査した。

西側の地域では以下の3遺跡においてビールを確認することができた。

ビール・クレディ遺跡 (Bir Kredy) (写真5)

マンスーラ (Mansura) から東に約15km、台地縁辺部から南方約10kmに位置する。円形の井戸であり、深さおよそ70mである。周辺からはいくつかの土器片が採集されており、ビザンツ時代以降の遺跡であると思われる。

アル=カブ・アル=サギール遺跡 (Al-Qabu al-Saghir) (写真6)

マンスーラから南東に約24km、台地縁辺部から約15kmに位置する。方形の井戸であり、深さ約170mとビール・クレディより深い。周辺からはビザンツ時代の土器片が採集されている。

ヘルベット・アル=ハルール遺跡 (Kherbet al-Halul) (写真7)

ラサーファ遺跡から南に約25kmに位置する。円形の井戸とそれに接して15m×3mほどの方形給水施設がある。特にマウンドはないが、現代において遺構の建築材の石材を利用するため、井戸の周辺はかなりの範囲で掘り返されている。



写真5 ビール・クレディ遺跡



写真6 アル=カブ・アル=サギール遺跡

ラッカ市より東側の地域においては、ビールを冠する以下の5つの地点において踏査を行った。

ビール・ブエイダン (Bir Bueidan) (写真8)

ビール・ブエイダンは台地縁辺部から13kmほど南、ガーネム・アル=アリ村からジャバル・ビシュリへ到る道路の東方2kmほどに位置する。井戸は直径約1.4mの円形で、井戸の壁は玄武岩の岩を組んでつくられる。また井戸から北東方向に幅約1.3m、長さ約10mのコンクリート製水路状施設が伸びている。おそらく、羊やヤギといった家畜のための給水施設であろう。現在は、水が涸れている。

ビール・ハルダン (Bir al-Hardan) (写真9)

ビール・ブエイダンの3kmほど南西、台地縁辺部から11kmほど南に位置する。井戸は直径2mほどでコンクリートにより囲まれている。北西方向にはやはりコンクリートでできた方形の給水施設がある。また、井戸から東西両方向にそれぞれ長さ15mほどの水路状給水施設の残骸が確認できた。現在は基礎になる玄武岩が部分的に確認されるのみである。現在は水が涸れている。

ビール・ハトゥン (Bir Khatun) (写真10)

ビール・ハルダンの3kmほど東、台地縁辺部から



写真7 ヘルベット・アル=ハルール遺跡 (写真中央鉄材の下に円形の井戸あり)



写真8 ビール・ブエイダン



写真9 ビール・ハルダン

9.5kmほど南に位置する。近隣の遊牧民の話によると、ハトゥンとはこの地に移住してきたアルメニア人の名前であり、その名前にちなんで井戸が名付けられたという。またコンクリートで囲まれたこの井戸の水は、現在涸れてしまっているが、20年ほど前までは水を供給していたようである。ビール・ハルダンは北西方向に玄武岩、南東方向に石膏を利用した長さ約10mほどの水路状給水施設を有していたが、現在は基礎の一部が残存するのみである。

ビール・アリ・アル＝マジード (Bir Ali al-Mazyd)

(写真11)

ビール・カトゥンの南東およそ6kmに位置する。直径約1m、コンクリートで囲まれたこの井戸は、今回の調査対象の中で唯一水を蓄えていて、近隣の遊牧民の話では、30年ほど前まで実際に使用していたようである。東西に延びる水路状給水施設も、コンクリートで全体が補強されている。

ビール・マズラアット・アル＝マナール (Bir Mazra'at al-manarh) (写真12)

ラッカ市から東約20kmに位置するハウイジット・シュンナン (Hauijt Shnnan) より南西に約3km、台地縁辺部から南に約3.5kmに位置する。ビール・マズラアット・アル＝マナールは上述した4つの井戸とは違い、低いマウンドの中心に位置し、岩盤を1.2×1.8mほどの方形に彫り込んだ井戸である。井戸の西側に給水施設のような痕跡が確認されるが、詳細は不明である。少なくともこれまで見てきた水路状に長く延びた施設ではなさそうである。現在、水は涸れている。

ラッカ市の西側で確認したビールの周辺には、ビザンツ時代以降の遺跡が点在していることが今回の調査から明らかになった。この三つのビールからも同じくビザンツ時代以降の遺物が採集されていることから、同時期に周辺に水を供給していた可能性が考えられ



写真10 ビール・ハトゥン



写真11 ビール・アリ・アル＝マジード



写真12 ビール・マズラアット・アル＝マナール

る。しかし、ビール・ディッディに比すると極めて小規模であると言わざるをえない。また残念ながら青銅器時代の遺物を確認することはできなかった。

一方、ラッカ市より東側の5箇所のビールの調査では、残念ながらいかなる時代の遺物も確認することはできなかった。調査中に出会った遊牧民の話では、これらの井戸はおおよそ30年ほど前までは実際に使っていたようである。しかし、現在はユーフラテス河の水を給水車が台地の上まで運んでくるそうで、現在はその水を利用することが多いという。しかし、今回の調査はあくまで短期間にかつ試験的に行ったものであり、特に西側の地域に関しては、調査したビールも台地縁辺部より南に15km程度の範囲で確認できたものばかりである。ビール・ディッディのような複合遺跡の性格を明らかにし、さらには台地上において、鉄器時代や青銅器時代に遡る遊牧民の遺跡を発見するに

は、さらなる調査と資料の蓄積が不可欠である。

台地縁辺部

氾濫原からジャバル・ビシュリのある南方を望むと、おおよそ60～80mの高さの絶壁が立ちはだかっているように見える。今回の調査では、この崖状になっている部分の頂部にイスラム時代の砦と思われる3つの遺跡を確認した（図3、4）。

ナヒーラ遺跡（Nakhila）（写真13）

ナヒーラ遺跡はラッカ市から南東約23kmに位置する。氾濫原の南端ある町アル＝ラプト（Al-Rabt）を見下ろすように、台地縁辺部の頂上に立地している（写真14）。典型的なイスラム期の砦遺跡である。南北方向に約100m、東西方向に約40mの規模で、北西方向に突出した凸形のプランを呈する。石膏の切り石を利用して基礎をつくり、その上部を焼きレンガで構築している。北側隅には焼きレンガによる高さ4mほどの櫓状遺構（写真15）、南側に高さ3mほどの壁（写真16）が遺存している。当該遺跡は少なくとも、南東側と北東側の2つに門を有していたと思われる。

カラート・サフィン遺跡（Qala't Safin）（写真17）

カラート・サフィン遺跡はラッカ市から南東16kmに位置する。ジャバル・サフィンと呼ばれる台地縁辺部の頂上にあり、立地条件はナヒーラ遺跡と酷似している。東西方向に約60m、南北方向に約30mの不規則な長方形プランを呈する。当該遺跡は南壁から突出した部屋を少なくとも2つ有する。これは南方にあるジャバル・ビシュリからの敵に備えた防御施設であった

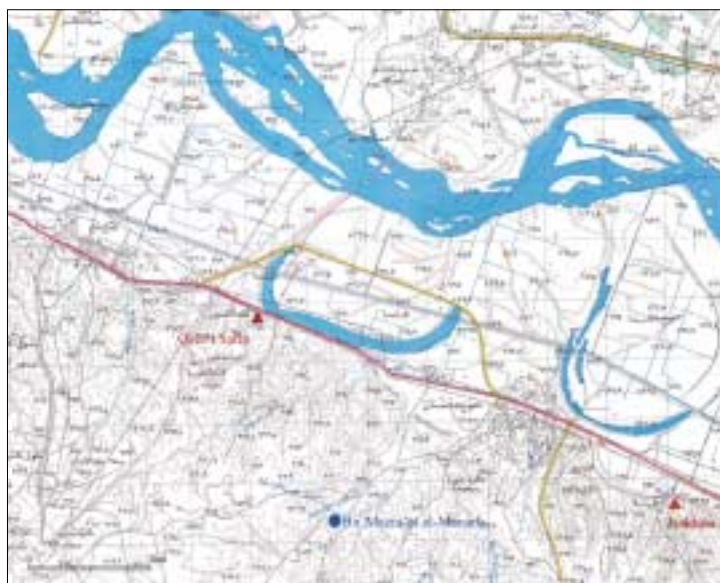


図3 台地縁辺部における遺跡分布図（シリア政府発行5万分の1地形図を一部改変）

可能性がある（写真18）。カラート・サフィン遺跡はナヒーラ遺跡とは異なり、建築材には石材を多用し、焼きレンガは使用されていない。イスラム期の土器が採集されている。

ジャズラ遺跡（Jazla）*

ジャズラ遺跡はラッカ市から南東約55km、ガーネム・アル＝アリという町から南東3kmに位置する。上述の2遺跡と同じく、台地縁辺部の頂上に位置している。周辺の南側から西側にかけてワディが入っているために、独立した丘陵状に見える部分に立地している。規模はカラート・サフィン遺跡よりも大きい、目立った上部構造は残っていない。

ガーネム・アル＝アリからジャバル・ビシュリへ向かう道路に沿って約2km南側に入り、その道路からはずれて東側に約1kmあたりに、マイヤー（Meyer）によって緊急発掘されたアブ・ハマド遺跡（Abu Hamad）が報告されている（Khalaf and Meyer 1993/1994）。マイヤーの報告によると、アブ・ハマド遺跡は青銅器時代の石室墓、シャフト墓、土壙墓などの広範囲に分布する埋葬施設の集合からなる遺跡である。上述したジャズラ遺跡を取り巻くように延びているワディの周辺には、アブ・ハマド遺跡に見られる埋葬施設に類似する竪穴や土壙が数多くあ



図4 ラッカ市以東における「ビール」及び氾濫原の遺跡分布図（シリア政府発行5万分の1地形図を一部改変）



写真13 ナヒーラ遺跡



写真14 ナヒーラ遺跡遠景

り、またその周辺からは青銅器時代のものと思われる土器片を多数確認した。こうした墓域は、アブ・ハマド遺跡やジャズラ遺跡周辺だけでなく、台地縁辺部とその周辺に数多く存在する可能性がある。今後、同様な立地における詳細な踏査を行う必要がある。

汜濫原

バリーフ川以東におけるラッカ市周辺の汜濫原では、大規模テル型遺跡としては市街から東約1 kmという近隣に位置するテル・ビーア (Tell Bi'a) 遺跡が有名である。当該遺跡は、シュトロメンガー (Strommenger) らによって発掘調査がされており、古代都市トゥットゥル (Tuttul) に比定されている (Strommenger and Kohlmeyer 1998)。しかし、この地域の汜濫原においては、これまで組織的な踏査がなされなかったためか、テル・ビーア以外の遺跡は報告されていなかった (Anastasio *et al.* 2004)。今回、我々の調査では、汜濫原において3つの中規模テル型遺跡を新たに確認した (図4、5)。

テル・シェイフ・アサド遺跡 (Tell Sheikh Asad)*

(写真19)

テル・シェイフ・アサド遺跡は、ラッカ市から南東に約7 km、ラトラ (Ratla) 村の北側に位置する。汜濫原の南端から約2 km、ユーフラテス河が南に大きく蛇行する付近であるため、南岸までは約1 kmである。当該遺跡は独立した微高地の上に立地し、南北に



写真15 ナヒーラ遺跡 (北側隅の櫓状遺構)



写真16 ナヒーラ遺跡 (南側の壁)



写真17 カラート・サフィン遺跡

長軸をもつ楕円形を呈する。規模は南北に150m、東西に100mほどであり、周辺との比高差は15mほどある。東西側が急斜面であるのにたいし、北側の斜面はなだらかであり尾根筋は北東方向を向いている。現況は荒地であり、耕作地や現代の墓域としては使用されていない。周辺は小麦畑に囲まれており、遺跡から南西方向には、畑の中に聖者の祠が2軒建っている。

テル・ハマディーン遺跡 (Tell Hamadin) (写真20)

テル・ハマディーン遺跡は、ラッカ市から南東に約43km、ジブリ (Al-Jibly) という町の付近に位置する。汜濫原の南端から約1 km、ユーフラテス河南岸まで約4 kmである。当該遺跡はヒトデ状に伸びた微高地の一端に、北東方向に連続してならぶ2つのテルから形成される。俯瞰すると瓢箪のような形状である。北

側のテルは直径が150mほどであり、周辺との比高差はおよそ7～8mほどか。南側のテルはさらに小さく直径50mほどである。周辺は小麦畑に囲まれており、南側のテルの現況は荒地であるが、北側のテル頂上部の一部は現代の周辺集落の墓域として利用されている。総じて東側の斜面のほうが西側に比して急勾配である。現代において人為的な地形改変を受けた痕跡は、特に確認できなかった。遺跡からは青銅器時代の土器が採集されている。特にテル頂上部にドアソケットのような柄を穿った建築材の一部や玄武岩製の石皿などを少数確認した。

テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡 (Tell Ghanem al-Ali) (写真21)

テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡はテル・ハマディーン遺跡の東約6km、ガーネム・アル＝アリという町の北東約1.5kmに位置している。氾濫原の南端から



写真18 カラート・サフィン遺跡 (南側に突出した部屋)



図5 テル・シェイフ・アサド遺跡 (シリア政府発行5万分の1地形図を一部改変)

約1km、ユーフラテス河南岸まで約2.5kmである。独立した微高地上に立地し、東西約300m、南北約200mを測る楕円形をした単独のテルである。周辺は小麦畑に囲まれているが、南側は遺跡に隣接して現在建設中の施設がある。現況はテル頂上部が周辺集落の墓域として利用されているが、頂上部の縁辺付近や斜面に関しては、目立った利用はされておらず、荒地である。テル西側の斜面は裾の部分が人為的に削られ平坦にされている。また南西隅も、以前鉄筋コンクリートの建築物があったようで、人為的な土地の改変がみられる。

テル頂上部に広がる墓域では、テル・ハマディーン遺跡でもみられた、玄武岩や石膏を利用したドアソケットのような柄を穿った建築材や石皿などの石製品(写真22、23)が、数多く墓のために用いられている。また、テル頂上平坦面の縁辺から斜面中腹にかけて石膏を利用した建築遺構の基礎部が、部分的に露出している。これらは直線やL字、コの字形をしているようであるが、その帰属時期や詳細なプランについては現在のところ不明である。当該遺跡に関しては2007年5月に詳細な測量調査を行った。現在図面の整理作業を進めている最中である。その成果については稿を改めて報告したい。

おわりに

今回の踏査において、台地平坦部における遺跡の分布の特徴は、現在も保存状態の良い教会等の建築遺構の残るラサーファ遺跡(Rasafa)を中心に、ラッカ市の市街地より西側にローマ時代以降の遺跡が集中している点である。それに対し、東側の地域では西側にみられるような遺跡は、確認することができなかった。また地図上において東側の地域に数多く示されているビールの地点からも、イスラム時代以前の痕跡は確認できなかった。

ジャバル・ビシュリの西側と北側の外縁には、これまで遊牧民に対する防衛線が敷かれていた。ローマ時代にはStrata Diocletianaと呼ばれ、ローマ軍の防衛前線が敷かれた。また初期イスラム時代においては、ジャバル・ビシュリの南西麓にカサル・アル・ヘイル・シャルキ遺跡が、ウマイヤ王朝を砂漠の民から防衛する目的で設置された。我々の調査で、西側に遺跡が集中する一方で、東側のビールにおいて全く遺物が採集できなかったこと、台地縁辺部に3つの砦遺跡を確認したことは、こうした時代背景を裏付ける結果となった。

一方、アブ・ハマド遺跡や、ジャズラ遺跡の周辺で確認することができた青銅器時代の埋葬施設を主体と



写真19 テル・シェイフ・アサド遺跡



写真20 テル・ハマディーン遺跡

する遺跡群は、その分布を含め詳細はなお不明である。西側および南側にどこまでの広がりをみせるのかは、今後の調査のひとつの課題となるであろう。また、ジャバル・ビシュリ内やその台地平坦部全域に数多く存在しているケルンとの関係も極めて興味深い。

アブ・ハマド遺跡を発掘したマイヤーは出土遺物から、被葬者は都市民である可能性が高いと考えている(Meyer 1993/1994)。我々の調査で確認したテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡は、アブ・ハマド遺跡の被葬者が生活していた集落遺跡である可能性は高い。しかし、マイヤーはアブ・ハマド遺跡以外にも同様な埋葬施設からなる遺跡群の存在を指摘している。そしてそうした墓域となる遺跡に比して、集落遺跡が小規模すぎるのではないかと疑問も投げかけている。マイヤーはそのような集落遺跡として具体的に遺跡を想定しているかを明確にしていらないが、少なくともアブ・ハマド遺跡に対する集落遺跡には、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡を念頭においていると思われる。我々の調査では、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡以外にテル・ハマディーン遺跡とテル・シェイフ・アサド遺跡を確認しているが、依然として網羅的な調査を行っているとはいえない状態である。埋葬施設を主体とする台地縁辺部にある遺跡群の分布と、集落遺跡と思われる氾濫原に位置するテル型遺跡の分布との相関関係は、埋葬された被葬者の性質を知るうえでも極めて興味深い。今後も、発掘作業と併行して詳細な遺跡踏査を継続していく必要があると考える。



写真21 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡



写真22 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡 (玄武岩製石製品)



写真23 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡 (石膏製ドアソケットか)

＊ジャズラ遺跡およびテル・シェイフ・アサド遺跡は、2007年5月に行った、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の測量調査を主目的とした第二次調査において、補足的に行われた踏査で確認した遺跡である。

主要参考文献

- Anastasio, S., Lebeau, M. and Sauvage, M. 2004 *Atlas of Preclassical Upper Mesopotamia*, Subartu 13, Turnhout, Brepols.
- Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J.-W., und Vila, E. 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. Im syrischen Euphrattal, 4. Der Friedhof von Abu Hamed*, Saarwellingen, Saarländische Druckerei & Verlag.
- Al-Khalaf, M. and Meyer, J.-W. 1993/1994 Abu Hamad, *Archiv Für Orientforschung* 40/41, 196-200.
- Strommenger, E. and K. Kohlmeyer, 1998 *Tall Bi'a-Tuttul-1, Die Altorientalischen Bestattungen*, Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei & Verlag.
- 常木 晃 2006 「考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ」『セム系部族社会の形成』Newsletter No. 3, 1～8頁

表採遺物から見た各遺跡の時代

木内智康（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」研究協力者

はじめに

筆者は2007年2月～3月のビシュリ・サーヴェイに参加し遺物を実見する機会を得た。ここでは表採した遺物から判断できる各遺跡の大まかな時代について述べることにする。内容としては2007年3月25日のシンポジウムで述べたことを元としているが、若干の変更も加えてある。本稿の目的は詳細な報告ではなく、多くの方々に各遺跡から表採された遺物とその時代に関する概要を知っていただくことにある。そのため、一部の写真のみを提示して概略を述べるにとどめる。また、同じ理由で時代判定の根拠とする参考文献等をその都度提示することはしないが、主な参考文献については本稿の最後に掲げておく。

このサーヴェイによって発見された遺跡は中期旧石

器時代、青銅器時代、ローマ時代以降に大別される。その間の時代の遺跡が見つからなかったことは、おそらくサーヴェイの精度に関係すると思われる。具体的なサーヴェイの手法については長谷川氏の記述に譲るが、今後の調査によってさらに多くの遺跡が記録され、欠けている時代の遺跡もその中に含まれることになる。幸いにして青銅器時代の遺跡は調査地域東部の一所に集中して発見されたので、西から順に紹介していく。メインとなる青銅器時代の遺跡については最後に述べる。なお、表採された遺物の大部分は土器であり、口縁部や底部片、その他装飾を持つ土器片が主に採集された。各遺跡での表採の方法はランダムなもので、区画を分けて採集するようなシステムティックな手法は用いていない。



図1 ラサーファ北遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)



図2 ヘルベット・アル・ハルール遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)

ラサーファ北遺跡 (Rasafa North)

最も顕著なのはLate Roman C Wareと呼ばれる一群の土器である（図1左上など）。その精緻な胎土と明赤褐色の色調、および器形は非常に特徴的であり、その名称の示すとおりローマ時代後期を示す良い指標となっている。また、いわゆるBrittle Wareと呼ばれる一群の調理用土器もローマ時代以降にこの地域でよく見られる土器であり、表採された口縁部片はおそらくビザンツ時代の特徴を示している（図1左上から2段目）。そのほかには彩文を持つ胴部片も採集された。これはビザンツ期から初期イスラム時代に見られる彩文と考えられる。このほかこの遺跡ではガラス製品も表採することができた（図1下、腕輪と容器片）。以上からおおよそローマ時代後期から初期イスラム時代にかけての遺跡であると言える。

ヘルベット・アル・ハルール遺跡 (Kherbet al-Halul)

遺跡の各所でビザンツ瓦が散乱していたことから、ビザンツ期の居住があったことは間違いない。その他採集した土器片も大部分が同時期のものと見られる。ラサーファ北遺跡でも述べたBrittle Wareがここでも見られる（図2右下など）。また、口縁上に同心円状の刻みを持つ土器（図2上段左から2つ目：この写真では視認できない）はビザンツ期から初期イスラム期



図3 バラーイット・テル・ハンマーム遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)

の特徴の一つである。よってこの遺跡はビザンツ期から初期イスラム期の遺跡であろう。

バラーイット・テル・ハンマーム遺跡 (Barayt Tell Hammam)

遺跡上では土器片も少数ながら採集できたのだが、時代決定に足る特徴的な土器片は拾えなかった。この遺跡では石器が採集されている。ほぼ全てが中期旧石器時代の石器であると考えられる (図3)。

GCHS C113遺跡 (Site GCHS C113)

最初にこの遺跡を遠望したとき、このテルの形状からして青銅器時代の遺跡ではないかと我々は期待した。しかし近づいていみると多くのビザンツ瓦 (図4上) が散乱していた。土器についてもビザンツ期と考えられる、特徴的な稜を多数持つ土器片が採集できた (図4下中央)。このほか、おそらくローマ時代まで遡ると考えられる土器片 (図4左下) も採集されている。

アル・フラ遺跡 (Al-Hura)

この遺跡で再びLate Roman C Wareが見られる (図5右)。また、2点の口縁部片はおそらくビザンツ期に属すと考えられる。よって、この遺跡もおおよそローマ時代後期からビザンツ期にかけての遺跡と言えよう。

ビール・クレディ遺跡 (Bir Kredy)

貼付文を持つ口縁部片 (図6左) はビザンツ期の土器である。また、把手の破片 (図6中央) は Brittle Ware であり、これらもおそらくビザンツ期のもので



図4 GCHS C113遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)



図5 アル・フラ遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)



図6 ビール・クレディ遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)



図7 アル・カブ・アッ・サギール遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)

であろう。そのほか、青釉のかかった陶片 (図6右から2つ目) もある。これはイスラム期まで時代の下るものであろう。

アル・カブ・アッ・サギール遺跡 (Al-Qabu al-Saghir)

あまり多くの遺物は拾うことができなかった。しかし、採集した把手の一つはBrittle Ware (図7左)であり、ビザンツ期に属すと考えられる。また、このほかに写真には掲載していないが、時代不詳のタイルも見つかっている。

テル・ムヘイル遺跡 (Tell Muheir) およびテル・ムヘイル東遺跡 (Tell Muheir East)

これら2つの遺跡は1.5kmほど互いに離れて位置する別個の遺跡であるが、表採された遺物(図8、9)からはいずれも時代決定が困難であったため、ここでは併記することにした。ともにローマ時代以降という印象を受けるものの、決定的な証拠に欠ける。



図8 テル・ムヘイル遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)



図9 テル・ムヘイル東遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)



図10 ナヒーラ遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)

ナヒーラ遺跡 (Nakhila)

特徴的な土器としては、口縁部に指頭圧痕を持つ土器(図10上段中央)と刻文を持つ土器片(図10下段左から2つ目)。いずれもイスラム期のものだろう。また、緑釉陶器片(図10下段左から3つ目)も見られる。これもイスラム期と考えてよいだろう。

カラート・サフィン遺跡 (Qala't Safin)

口縁部片はいずれもビザンツ期から初期イスラム期のものであろう。図11中央はBrittle Wareである。底部片(図11右)は青釉陶片で、ローマ/パルティア期に属す可能性がある。

前期青銅器時代の編年 (図12)

ここから青銅器時代の遺跡に入るわけだが、その前に編年の問題に触れておきたい。本稿では前期青銅器(Early Bronze、以下EB)の編年を用いる。伝統的にユーフラテス川中流域ではEB編年を用いてきているからである。しかし以下で述べるテル・ガーネム・アル・アリ遺跡が位置する地域(ラッカから約50km東)にEB編年を用いるべきかどうかは今後調査が進展する中で検討していかなければならない問題であると筆者は考えている。もちろん、南メソポタミアの編年を用いることが妥当とも思われない。かつてマチエはシリア独自の編年としてシリア編年(Protosyrian、Old Syrian、Middle Syrian)を提示した(Matthiae 1981)。この編年体系はあまり普及することはなかったが、独自の編年体系ということでは近年プフェルツナー(Pfälzner and Dohmann- Pfälzner 2001)やルボー(Lebeau 2000)らによる初期ジャジラ(Early Jazirah)編年が提唱されている。当該地域はジャジラからはわずかに外れた位置にあり、ユーフラテス中流域という大枠にくくるのであればEB編年を用いることも誤りではないといえる。実際、ドイツ隊によるアブ・ハマド(Abu Hamad)遺跡の調査ではEB編年を用いてい



図11 カラート・サフィン遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdissi)

る (Falb *et al* 2005, Al-Khalaf and Meyer 1993/1994, <http://web.uni-frankfurt.de/fb09/vorderasarch/abuhamed.htm>)。しかし、最近ではユーフラテス中流域の編年においても従来のEB編年の枠組みを用いない方向に向かっている。そもそもユーフラテス中流域にEB編年を適用する場合、トルコ方面とパレスチナ方面のいずれのEB編年を参照するのかという根本的な問題が生じる。両者には若干の違いが存在しているのである。そうした中でEBを前中後期 (Early、Middle、Late) に細分するウィルキンソンの編年 (Wilkinson 2004) やPhase 1 から6までに細分するポーターによる編年 (ポーターによる論考は未出版であるが、概要はCooper 2006において知ることができる) などが提示されており、今後ユーフラテス中流域に関してはこれらの編年枠のいずれかが主流となる可能性がある。

以上は相対編年の問題であったが、さらに編年問題を複雑にしているのが絶対年代の問題である。ご承知のように従来主流であった年代は中年代 (Middle Chronology) というもので、これはバビロンがヒッタイトの攻撃により崩落した暦年代を前1595年としたものである。しかし、近年ガッシュェらが新年代を提示して以降 (Gasche *et al* 1998) 状況は極めて流動的となっているようである。今後の状況は不透明であるが、本稿では伝統的な中年代に拠ることとする。以上については図12にまとめてあるので参照していただきたい。

なお、こうした相対・絶対年代に関する問題は現在西アジアの前三千年紀を扱う研究者の間に共通した課題となっており、ARCANEというプロジェクト (<http://www.arcane.uni-tuebingen.de/>) においても主題の一つとして扱われているようだ。しかしここでは表採遺物から推測される各遺跡のおおよその年代を示すことが目的であるから、この問題にはこれ以上深入りしないことにして実際の遺物を示すことにしよう。

テル・ハマディン遺跡 (Tell Hammadin)

少なくとも2つのテルからなる遺跡であり、今から考えればテルごとに表採を行うべきであった。結果的に2つの遺跡の遺物を混せて採取したことになる。しかし、全体としては前期青銅器時代の前半の枠内で考えることができると思われる。その判断材料となるのは、厚さ一定で断面逆L字状に張り出す口縁部 (図13a) や、薄手で内湾する碗 (図13b) などである。また、写真では見えないが、一部の口縁部内面には一条の凹みがあり、これも前期青銅器時代前半によく見られる特徴である。

年代 (BC)		南メソポタミア	青銅器時代			初期ジャジラ (EJ)		北西シリア		
中年代	低年代		パレスチナ	シリア	トルコ	Lebeau 2000	Pfalzner 2001	アムーク (Amuq)	ハマ (Hama)	
3000-2900	2900-2800	Jamdat Nasr	EB II	EB I	EB I	0	0	G	K	
2900-2700	2800-2600	ED I		EB II	EB III	I	I			H
2700-2600	2600-2500	ED II		EB III		II	II	IIIa		
2600-2500	2500-2375	ED IIIa				IIIa	IIIa			
2500-2350	2375-2050	ED IIIb	EB IV	EB IVa	EB IIIA	IIIb	IIIb	I	J	
2350-2170	2230-2050	Akkadian post-Akkad			EB IIIB	IV	IV			
2170-2000	2050-1940	Ur-III		(EB-MB) MB I	EB IVb	EB IIIC	v	v		J

図12 前三千年紀の編年表
(Anastasio *et al* 2004 fig. 7を一部改変)



図13 テル・ハマディン遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)



図14 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡表採遺物その1
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡 (Tell Ghanem al-Ali)

ハマディンに比べると、ガーネム・アリ遺跡のほうが判断しやすい土器を拾うことができた。まず特徴的な器形として挙げられるのは、口縁部に数本の稜を持つ壺である。これらはEBIV期からEB-MB移行期にかけて非常によく見られるタイプである (図14a)。また、ほぼ同じ年代を示す土器としては、口縁部が肥厚するタイプ (図14b) も挙げることができる。このほか、

彩文土器片も採集できた(図15)。これらは薄手の精製土器で、ユーフラテス彩文土器(Euphrates Banded Ware)またはユーフラテス精製土器(Euphrates Fine Ware)と呼ばれる土器で、EBIII期を中心に見られる土器である。また、写真には挙げていないが鎌刃と考えられる石刃も表採できた。それらは前三千年紀前葉まで遡る可能性がある。以上から、当遺跡は少なくとも前三千年紀半ばから前三千年紀末までの居住があったと考えられる。ただし、鎌刃の存在やEB-MB移行期の可能性がある土器片から判断すると前後にもう少し幅を持たせたほうがよいかもしれない。

アブ・ハマド遺跡 (Abu Hamad)

既にドイツ隊によって調査されている。上述のように既に報告書が刊行されており、そのほか概報やホームページでも情報を得ることができる。そこではEBIII~IVa期の墓地であったと報告されている。我々が採取した土器片の中には積極的にEBIV期を示す資料は乏しかったが、例えば写真に挙げたようにユーフラテス精製土器に含められる(つまりEBIII期ごろの)、らせん状磨研土器(Spiral Burnished Ware)の底部片(図16a)を採集することができた。このほか中期旧石器時代の石器も表採されている。



図15 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡表採遺物その2
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)



図16 アブ・ハマド遺跡表採遺物
(By courtesy of Dr. Michel Al Maqdisi)

おわりに

以上のように、今回のサーヴェイでは前期青銅器時代の包含層を持つと考えられる遺跡を見つけ出すことに成功した。テル・ハマディン遺跡とテル・ガーネム・アル・アリ遺跡については発掘可能の見通しとなり、後者は今夏に試掘調査することが決定している。そこで後者の遺跡に居住があったと考えられる、前期青銅器時代後半がどのような時代であったのかを述べることでまとめに代えたい。

ユーフラテス川を少しさかのぼったアサド湖地域で1960年代以降、さらに上流のティシュリン・ダム地域で1980年代以降に多くの緊急調査が行われた結果、この地域については多くのことが分かるようになってきた。そうして明らかになってきたことの一つは、前三千年紀中ごろに進展する都市化と前三千年紀末の都市崩壊である。前三千年紀中ごろ以降に拠点集落の規模が拡大して都市化が進行するのだが、そうした諸都市は前三千年紀末に崩壊する。しかし、完全に居住が無くなるわけではなく一部の集落は細々と存続し、前二千年紀初頭に再び複雑社会を形成し始める。前三千年紀末の都市崩壊の背景には広範囲に及ぶ環境の悪化があったとも言われている(Weiss et al. 1993)が、否定的な見解もあり結論は出ていない。

ところで、都市社会の崩壊の理由が何であったにせよ、この崩壊を乗り越えることができた背景には、1) 遊牧や狩猟を重視した多角的生業、2) 各都市の自律性、3) 部族社会などの存在があったことが指摘されている(Cooper上掲書 270ff)。これらの点は本プロジェクトにとって見逃せない点であろう。また、周辺でこれまでに調査された都市遺跡が存在しない(例外的に発掘されているアブ・ハマドは墓地遺跡である)という点も重要である。これまで調査空白地域であったこの地域での調査は必ずや青銅器時代の研究にとって多くの寄与をもたらすことであろう。夏以降の調査が非常に待ち遠しく感じられる次第である。

主な参考文献

- Anastasio, S., Lebeau, M. and Sauvage, M. 2004
Atlas of Preclassical Upper Mesopotamia, Subartu 13, Turnhout, Brepols.
- Cooper, L. 2006
Early Urbanism on the Syrian Euphrates, New York and London, Routledge.
- Villeneuve, E. et Watson, P. M. 2001
La Céramique Byzantine et Proto-Islamique en Syrie-Jordanie (IVe-VIIIe siècles apr. J.-C.), Actes du colloque tenu à Amman les 3, 4 et 5 décembre 1994, Beyrouth, IFAPO.
- Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J-W., und Vila, E. 2005
Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. Im syrischen Euphrattal, 4. Der

- Friedhof von Abu Hamed*, Saarwellingen, Saarländische Druckerie & Verlag.
- Gasche, H., Armstrong, J. A., Cole, S. W., and Gurzadyan, V. G. 1998 *Dating the Fall of Babylon: A reappraisal of Second-Millennium Chronology (A Joint Ghent-Chicago-Harvard Project)*, Mesopotamian History and Environment Series II Memoirs IV, University of Ghent and the Oriental Institute of the University of Chicago.
- Hayes, J. W. 1972 *Late Roman Pottery*, London, The British School at Rome.
- Al-Khalaf, M. and Meyer, J.-W. 1993/1994 Abu Hamad, *Archiv Für Orientforschung* 40/41, pp. 196-200.
- Lebeau, M. 2000 Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third Millennium B.C., in Marro, C. and Hauptmann, H. (eds.) *Chronologies des pays du Caucase et d l'Euphrate aux IVe-IIIe millénaires*, Varia Anatolica 11, Paris, Institut Français d'Etudes Anatoliennes d'Istanbul.
- Margueron, J. C.(ed.) 1980 *Le Moyen Euphrate: Zone de contacts et d'échanges*, Leiden, E. J. Brill.
- Matthiae, P. 1981 *Ebla : An Empire Rediscovered*, New York, Doubleday & Company, Inc.
- Pfälzner, P. und Dohmann- Pfälzner, H. 2001 Ausgrabungen der Deutschen Orient-Gesellschaft in der zentralen Oberstadt von Tall Mozan/Urkeš, Breit über die in Kooperation mit dem IIMAS durchgeführte Kampagne 2000, *MDOG* 133, pp. 97-139.
- Weiss, H., M.-A. Courty, W. Wetterstorom, F. Guichard, L. Senior, R. Meadow, and Curnow, A. 1993 *The Genesis and Collapse of Third Millennium North*

Mesopotamian Civilization, *Science* 261, pp. 995-1005.

Wilkinson, T. J. 2004

On the Margin of the Euphrates : Settlement and Land Use at Tell es-Sweyhat and in the Upper Lake Assad Area, Syria, Excavations at Tell es-Sweyhat vol.1, OIP 124, Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.

謝辞

この日本・シリア合同調査における青銅器時代の遺物はシリア側の担当となっている。そうした中で写真掲載を許可していただいたシリア考古庁のミシェール・マクディスィ博士のご好意に謝意を表したい。また、筆者は元々は本調査のメンバーに入っていなかった。今回参加することができたのは、指導教官である西秋良宏先生から代理での参加を命じられるという幸運によるものであった。先生には普段よりご指導いただいているばかりでなくこのような機会を与えていただいたことに改めて感謝申し上げたい。なお、遺物の時代決定は筆者にとって、率直に言ってかなり困難な作業であった。以下の方々にご助言を賜り、また資料コピー等の便宜を図っていただくことによってかろうじてシンポジウムでの発表に漕ぎ着けたというのが実状であった：足立拓朗先生、大沼克彦先生、小泉龍人先生、下釜和也氏、シャーケル・アル・シュビブ氏、常木晃先生、沼本宏俊先生（五十音順）。この場を借りて感謝申し上げる次第である。

2007年3月ビシュリ山系現地調査

星野光雄（名古屋大学大学院環境学研究科）

計画研究「環境地質学、環境化学、14C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」研究代表者

1. はじめに

この特定領域研究が発足して2年目の2007年2月、大沼代表はじめ関係者の忍耐強い努力が実り、シリア考古局から待望の調査許可が下りた。これを受けて各研究班は早速、現地調査に赴いた。自然科学分析班からも田中剛、中村俊夫、そして私の3名が2007年3月9日～18日の期間、現地調査を実施した。短期間ではあったが、先発隊およびシリア側共同研究者の方々の多方面にわたるご配慮のお蔭で、多くの収穫を得ることができた。

私ども3名にとって初めてのシリア渡航であったため、見るものすべてが興味深く、目に触れたものすべてについてしっかりと観察してきたつもりである。本稿では、今回の現地調査で出会った事柄を旅日記風に記述した。そのため、調査以外のお粗末な見聞録が多くなってしまった。この点をご寛容いただきたい。

2. 上空から見たアラビア半島

2007年3月10日土曜日午後2時、飛行機はダマスカスに向けてドバイを飛び立った。ドバイからアラビア半島南部をかすめてナイロビへ向かう飛行コースは何度も経験しているが、今回はアラビア半島北部を縦断するコースをとる。このため、いままで見たこともない感動的な景観に遭遇できたのである。

窓際の席に座った同僚の田中さんが最初に発見し、何枚かの写真に収めたものは、緑被のほとんどない乾ききった陸地に点々と、あるいは密集して見られる緑



図1. サウジアラビアのセンターピボット灌漑農場群（田中 写）

の円形パターンであった（図1）。Google Earthの画像にも明瞭に写っていることは後でわかったのだが、これらの正体は、センターピボット方式といって、帯水層から汲み上げた地下水を350m以上もの長い腕をもったスプリンクラーをゴロゴロと回転させながら散水して小麦などを栽培する灌漑農場である（地球観測研究センターHP）。サウジアラビアでは、この農法によって小麦の輸出が可能にほど生産高が上昇した反面、地下水の枯渇が大いに危惧されているそうである。北米グレート・プレーンズの二の舞になりかねない。

3. 待望のダマスカス

約1時間半のフライトの後、無事ダマスカス空港に着陸した。通関手続きを済ませ、銀行で各人150ドルを換金した後、タクシーに乗り込む。ダマスカスへ向かう街道沿いの緑が想像以上に豊かで、なかには桜のような花をつけた樹木も見られるが、それらは植林らしく、灌漑により維持されている緑地帯のようだ。市街地が近づくにつれ、200万都市の雰囲気が出てきた。街の背後にそびえる奇怪な禿山、カシオン山が真っ先に目に飛び込む。急斜面の中腹までびっしりと、張り付くように建ち並ぶ住宅群（図2）が実に異様だ。旧約聖書にその名前が記された山の雰囲気は十分ある。

あらかじめ大沼さんに予約していただいたスルタン・ホテルに着き、レセプションで大沼さんの親切なメッセージと英文レポートを受け取る。ラッカ博物館のナウラス氏とアイハム氏が今夜面会に来る旨がメッセージに記されており、何から何まで手配していただいていることに感謝する。午後7時に二人が現れ、明日以降の調査計画を打ち合わせた。こちらは右も左もわからない身であり、ナウラス氏の提案をまるごと承知して別れた。

明けて3月11日金曜日、9時半にホテルを出てダマスカス博物館に向う。途中、三面工法で防護された直線状のバラダ川に出会う。あまりにも人工的過ぎて感心しない。川沿いの遊歩道で行われていた改修工事をしばらく観察する。四角く整形した玄武岩を敷き詰めている最中で、こちらは美しい歩道ができつつある。田中氏は、一般的には使われない玄武岩の敷石に大層

興味を示す。

前夜の打ち合わせ通り10時に考古局ミッシェル氏のオフィスを訪問するも、会議中とのこと。待ちぼうけはケニアで慣れてはいるものの、秘書室で1時間半ほど待って我慢し切れず、ナウラス氏に電話する。ところが、「今日は重要な会議でミッシェル氏も自分も午後3時頃まで抜けられそうもないからホテルで待機するように」との返事。仕方なくミッシェル氏への手土産の別刷りとメッセージを秘書に託してホテルに戻る。ただし、ホテルでじっとしているような我々ではなく、街を探索する絶好のチャンスとばかりヒジャズ駅方向に飛び出した。鉄板で焼いたクレープ風の薄皮（後でホブスという名前の主食であることを知った。何と勉強不足！）で肉と野菜を棒状に巻いた食べ物（サンドイッチ）とコーラを買って昼食とした。これがなかなかの美味で気持ちが一時的に和らぐ。3時が過ぎてもナウラス氏の来る気配がないので再び電話すると、今そちらに向かっているとの蕎麦屋の出前のような返事。結局、ホテルを出発したのが午後3時半。「今日中にラッカに辿り着くのですか？」と聞いたほど遅い出発であった。初日からどっと疲れが出た。

4. 一路ラッカへ

ナウラス氏が用意してくれたタクシーは、彼が普段、便利に使っている友人のものらしい。ヒュンダイ製ステーションワゴンに私ども3名とナウラス、アイハム両氏、それにドライバーのアゼズさん、そしてなんとナウラス氏の奥さんと子供まで乗っているではないか。さあいざ出発、と思いきや、空港でアナス氏を拾ってからラッカへ向かうとのこと。「アナス氏も共同研究者の一人ではあるし、また、奥さんと子供と一緒に乗せるのも構わないけど、余りにも“ついで”が多すぎるのではないですか。タクシー代はこちら持ちなんだから、あらかじめ一言いってほしいよね」と口に出かかったが、国民性の把握には時間がかかることもあろうと自分を納得させた。

ダマスカスから国道を北上すること約2時間、夕闇迫るホームスに着く。ドライブインで食事をとって再出発。ラッカへは何と深夜の23時半に到着した。それにしても韓国製のヒュンダイはよく走る。韓国の力を見直した瞬間である。道すがらの地形・地質・植生も明るいうちはよく観察できた。アンチ・レバノン山脈の東山麓でさえ森林と呼べるような緑被はほとんど見られないこと、したがって地質構造が詳細に観察できること、ダマスカスの敷石に使われていたような玄武岩の石切り場が多いことなどを確認し、乾燥地であるこ



図2. ダマスカス市街からカシオン山を望む（星野 写）

とを実感した。その夜は1ランク上のラザワード・ホテルでぐっすりと眠りに就いた。

5. 調査1日目

3月12日月曜日、先ずラッカ博物館へ向かう。こじんまりとした博物館らしい趣の建物である。一階ホールの中央にラッカ新博物館の模型が展示してあった。目下概算要求中とのことで、かなりの建築費とみたが、本当に実現したらアレppo博物館に負けない立派な博物館になるだろう。ナウラス氏の力の入れ様がよく理解できた。肝心の考古資料の重要性については、正直に言ってよく解らないが、もう少し陳列に工夫があってもよいのではないかと印象をもった。

ひとしきりナウラス、アナス両氏と歓談した後、市内にあるオールド・モスク、イスラミック・スクール、城壁公園の遺構を見学した。ローマ時代～イスラーム時代の歴史や建築様式に関する懇切なレクチャーをうけ、「シュックラーン」、「アフワン」の挨拶も教わり、オールド・モスクではもてなしのお茶をご馳走になった。当時も旅人には同じように接したことだろう、と勝手に想像した。城壁公園近くの新しいモスクも時間をかけて見学し、装飾の見事さにしばし見とれた。ここで初めて気づいたことだが、シリア人の昼食は必ずしも12時前後ではないようだ。

さあ、いよいよフィールド、と時計を見るともうすでに14時。今回は予察と割り切っているのであせりはない。ユーフラテス河沿いの国道をひた走ること小一時間、先発隊が選定した発掘候補遺跡のひとつ、テル・ハマディーンに到着した。現在、墓地として使われていることは一目でわかる。しかし何故これまで発掘が行われず、手付かずの状態であったのかをあれこれ考えてみた。墓標に使われている石材は大変興味深い。スレートのように扁平に剥離した乳濁色～淡緑色の石材は、一見石灰岩のようでもあり、どこか違うよ

うでもある。剥離面は鏡のように光を反射して、単結晶の結晶面に似ている。村人が近くの山から運んできたものに違いないと思い、明日以降の調査で採集場所を特定することとした。次に訪れたもうひとつの発掘候補遺跡であるテル・ガーネム・アル・アリも、同様に墓地として使われている。これらの小高い丘が、自然地形であるのか、それとも遺跡であるのかを即座に判断できる考古学者の目に感心しきり。ユーフラテス両岸に発達する氾濫原と河岸段丘は、教材として使えるほどに見事なものであった（図3）。

帰りがけ、この地区の村長マハメッド氏宅に挨拶に



図3．ユーフラテス河の氾濫原と高位段丘群（星野 写）



図4．テル・ハマディーン盗掘跡の地層断面（星野 写）



図5．テル・ハマディーンの塩類殻（田中 写）

伺う。高位段丘面からビシュリに続く台地斜面上にある豪邸の庭で出迎えていただいた。すでに村の長老らしき人物二人も居並び、サーバント・クォーターに出たり入ったり、少年が甲斐甲斐しくお茶やコーヒーを運んでくれる。やはり金持ちは高い所に住んで下界を睥睨したいのだろうか。ナウラス氏の通訳によれば、「このような家を発掘の際には基地として提供してもよい」とマハメッド氏が言っているとか。小一時間歓談した後、近くのレストランで夕食をご馳走になった。夜風は冷たくとも、夕食にはやはりビールが欲しい。敬虔なムスリムは本当に酒を飲まないのだろうか。スーダンでは、カルツーム大学の教授や地方の行政官がしばしば密造酒で酒盛りをしていたことを思い出した。もしかすると彼らは敬虔なムスリムではなかったのか。

6．調査2日目

3月13日火曜日9時前にホテルを出発。博物館に向かう途中の金物屋で長い柄のついたスコップを買う。125SEと、信じられないくらい安い。博物館を10時半に出発し、昨日のフィールドへ向かう。途中、サブハの町で大きくて厚目のホブスを10枚くらい、それにトマト、キュウリ、ネギ、缶詰類などを買い込む。どんな昼食となるのやら楽しみでもある。今日は背の高い怖そうな顔のモハムッド氏も同行。

昨日目を付けておいたテル・ハマディーンの盗掘跡に露出する地層断面を丹念にスケッチし、土壌・堆積物を次々サンプリングした。図4に示すように、5層のシルト層と1層の火山灰層らしきものが識別され、炭質物らしきものも含まれている。層理面も明瞭である。我々には自然堆積物のようにみえるが、古代遺跡の構造説明にあるような人工的な丘なのかもしれない。今後の興味深い研究テーマとなりそうである。テルの裾一面に塩類が析出し、厚さ5mmくらいの塩類殻を作っている（図5）。周囲の灌漑地の影響であろうか。一仕事終わり、畑の中での昼食を楽しんだ。新聞紙を広げたその上にホブスの円盤をポンポンと投げ広げ、さらにその上に食材を無造作に載せ、好みのスタイルで食べる（図6）。

テル・ガーネム・アル・アリの表層土壌・堆積物を記載・サンプリングした後、東方のゼノビア・ハラビ火山岩体に向かった。全山が玄武岩溶岩でできている（図7）。地質学的に興味深いのは、孤立した火山岩体がビシュリ山系に点々と存在する事実である。紅海－死海地溝帯に関連する火山活動とは考えにくく、このような安定したアラビア半島内部での新生代の火山活動は今後の課題である。



図6．昼食風景．左から中村さん、モハムッド氏、アゼズ氏、ナウラス氏、星野（田中 写）

7. 調査3日目

3月14日水曜日朝一番に、「テル・ハマディーンとテル・ガーネム・アル・アリの発掘許可が下りた」旨、ナウラス氏から伝えられた。このことを大沼さんに早くお知らせしなければと考え、日本から持参したノキアで何度か国際電話を試みたが（使い方が理解できていなかったため）なかなかうまくいかず、16日早朝にやっと連絡できた。さて、かねてナウラス氏に依頼しておいた詳細地質図が手に入るというので、地質調査所ラッカ出張所を訪ねる。100万分の1シリア全図はすでに持っているが、ビシュリ山系一帯のより詳しい地質図を探していたところである。さすがに地調、ソヴィエト調査による20万分の1地質図（1963年出版）を持っていた。ここにも中東現代史の一端が垣間見える。ビシュリ台地の調査に丸1日を使う当初の予定が大幅に狂い、地質図の件に加えて、どこに連れて行かれたのかわからないが、とにかく役所の立派なオフィスに通され、紹介されたことも重なって、これらで午前中を費してしまった。

ガーネム・アル・アリの町から南へ延びる幹線道路を見つけ、どんどん登る。この日は、ドライバーのアゼズ氏以外に博物館のモハムッド氏のための同行であったため、思うように意思疎通が図れず、大変苦労した。例えば、ビシュリ台地にあるいくつかの遺跡を見学した時のこと。小高い丘の上に掘られた穴を指差して説明してくれるのだが、「ビル」という言葉が盛んにでてくると大沼さんのレポートにあった「Bir」とが結びついて何となく理解できた。レポートにあらはじめ目を通しておいてよかったー！しかし、これでは何とも心もとない。アラビア語日常会話の必要性を痛感した次第である。台地には、スマレに似た可憐な草本群落が斑点状に見られ、その表層土壌は周囲に比べて若干湿っぽい（図8）。下層が不透水層であるか、



図7．ゼノビア・ハラビア火山（星野 写）



図8．ビシュリ台地の斑点状草本群落（星野 写）



図9．ビシュリ台地の中新統．上から石灰岩／石膏、シルト岩、泥岩（星野 写）

あるいは地下水面が近いかのどちらかであろう。

標高380mあたりからガーネム・アル・アリの町にかけての地質は、中新世トートニアン期に堆積した4層の石膏／石灰岩の地層と、それらの間にあるシルト岩・泥岩の地層（図9）が主体を占める。層理面は水平に近く、断層や褶曲などの変形構造は認められない。石膏層は、乾燥環境下にある静かな浅海で形成される典型的な蒸発岩であることから、詳しく分析することで当時の環境をかなり正確に推定することができるかもしれない。

ところで、調査1日目に見た墓標の石材の産地であるが、石膏層の風化の様子を観察したところ、図10に

示すように板状の割れ目が発達していた。これならば簡単な道具で掘り起こすことが可能であるとの理由で、墓標の石材はこのあたりから掘り出した石膏と推定した。若干緑がかっている点も根拠の一つにあげられる。

翌3月15日木曜日、大沼さんから出発前にメールでお知らせいただき、ナウラス氏からも依頼されていたレポートを今日中に仕上げて考古局に提出しなければならぬのである。したがってこの日は必死で英文レポートの作成に励む。午前中に書き上げ、午後からは街を散策するとの淡い希望もむなしく、また、英文がすらすら出てくる力もなく、結局、夕方までかかって仕上げたレポートをナウラス氏に提出する始末であっ



図10. 風化を受けて板状に割れた石膏層（星野 写）



図11. パルミラ遺跡（星野 写）



図12. ラッカ新博物館の模型（田中 写）

た。ナウラス氏も、その夜は必死でアラビア語に翻訳したとのことである。

8. ダマスカスへの帰路

3月16日金曜日、10時にチェックアウトを済ませ、ラッカを出発した。途中、レサファ遺跡とパルミラ遺跡に立ち寄るという欲張りな計画を立てたまではよかったが、案の定、ダマスカス到着は深夜となった。ラッカ初日に、ベルリン工科大学教授のドロシーさんと博物館で挨拶した際、「レサファにも是非立ち寄ってほしい」と言われ、また興味もあったからである。

レサファの主ともいえるドロシーさんのベースキャンプには正直驚いた。広い敷地に立派な施設が建っていて、清潔なトイレと台所、食堂、寝室すべてが完備している。さすがにドイツ調査隊と感じ入った。というのも、スーダンでとぼとぼと地質調査をしていた1991年、ドイツの地理学調査隊と出くわし、そのときの巨大な、冷房・バス・トイレ・キッチン完備の装甲車のようなキャンピングカーを思い出したからである。それはさておき、まだ何年かかるかもわからないが学術的意義の大きな遺跡発掘に対する息の長いドイツの文教政策に敬意を表したい。夢に見たパルミラ遺跡も印象深かった。どこをどう撮っても絵になる遺跡である。逆にいえば、誰もが感心する写真はなかなか撮れないということだ。最後に月並みな写真を掲載させていただく（図11）。スルタン・ホテルの前でナウラス氏、モハムド氏、アゼズ氏から次々とお別れの抱擁を受け、再開を約束した。

翌3月17日土曜日、唯一まとまった時間が取れたこの日はオールド・ダマスカス方面を精力的に歩き回り、シリア滞在最終日を堪能した次第である。

9. おわりに

現地調査が始まったばかりでこのようなことを言うのはおかしいが、思い起こせば、特定領域計画書に明記された研究の意義「セム系部族社会＝イスラーム原理主義＝テロリストという偏向的で短絡的な観念を根本から見直させるものである」に素直に感動した覚えがある。私が鈍感であるせいかもしれないが、今回訪れた場所のどこにも、きな臭い雰囲気を感じることはなかったし、ケニアでしばしば体験したような身の危険もまったく感じなかった。このような状況が今後もずっと続くことと、ラッカ新博物館（図12）の実現を願うばかりである。

最後に、今回の調査でお世話になった領域研究者の皆様とシリア側研究者の皆様にご心よりの謝意を表したい。

事務局だより

はやいもので、本特定領域研究は2年ちかくを経過しました。この間、5回のニュースレターを通して、本領域の研究班各々の研究方針は大方の理解を得たと思います。

しかしながら、諸般の事情による現地調査の大幅な遅れがビシュリ現地直送の情報を提供することを困難にしたことも事実です。

ようやく本年の3月に遺跡分布調査の許可を獲得し、現地調査にかかわる情報を公表できるようになりました。

今回のニュースレターは、この分布調査における調査日誌と調査の概要、そして、遺跡の分布状況と年代に関する研究小論で構成されています。現地調査の様子を知ってもらいたい、今後の本格的な現地調査へ向けた情報を分かち合ってもらいたい、という思いからこれらを掲載しました。

なお、このニュースレターは今号から、ページ数を変更せずして字数を2倍にし、より多くの情報を提供することになりました。掲載文1件あたりの字数のおおよその目安は、写真、図版等を含めて最大10,000字ほどになります。

現地調査が発進したいま、研究の成果をこれまで以上に積極的に掲載し、このニュースレターをより充実させていきたいと思っています。

(大沼克彦)

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.6 2007年6月30日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryoui/index.html

